

# 方定煥研究—誕生から10歳まで・幼少期の生家と時代背景 ～評伝『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』を読む～ A Study of Bang, Jeong-Hwan: His Historical Background and His Childhood

大竹聖美

Bang, Jeong-Hwan is revered as “the father of Korean children” or “the father of Korean children’s literature.” He is also the pioneer of modern Korean children’s literature and in human rights movement. In this paper, I will clarify the historical background, his biography and achievements by translating and annotating his Korean biography, *The Gift of Love, the Life of Sopa=Bang, Jeong-Hwan*, written by Lee, Sang-geum, the authority of Bang, Jeong-Hwan study in Korea, into Japanese.

## 1. はじめに

方定煥（パン・ジョンファン、1899年11月9日～1931年7月23日）は「韓国児童文学の父」あるいは「韓国の子どもの父」として敬愛される韓国近代児童文学の開拓者で、先駆的人権運動家である。ソウル市内のオリニ（子ども）大公園には大きな銅像<sup>i</sup>が立てられており、子ども向けの偉人伝記全集でも定番で、ある種伝説化された英雄である。

1931年に齢31歳で人々に惜しまれながら夭折したが、短期間で成し遂げた業績は大きい。韓国初の本格的児童文芸誌『オリニ』<sup>ii</sup>の創刊をはじめ、『新青年』<sup>iii</sup>、『新女性』<sup>iv</sup>、『学生』<sup>v</sup>などの韓国近代を代表する重要な雑誌を編集したほか、口演童話会、少年問題講演会、児童芸術講習会、少年指導者大会などを主催し、啓蒙運動、児童文化運動、児童文学運動の指導者として文学史、教育史に特筆される。

従来朝鮮では、子どもは「児孩（アヘ）」や「童蒙（ドンモン）」と呼ばれ、人格が認められていなかった。しかし方定煥はそれを儒教的旧弊とみなし、子どもの人格を尊重した呼称を創造しその普及に努めた。老人に対する「ヌルグニ」、若者を指す「チョルムニ」と同格で、幼

い人という意味の純粹韓国語である「オリニ」を造語したのである。方定煥は彼が創刊した韓国初の児童文芸誌にこの『オリニ』の名称を使ったし、「オリニナル（＝子どもの日）」<sup>vi</sup>を創設しながら、大人たちに「オリニを見下げないで、見上げるようにしてください」「オリニに敬語を使いやさしくしてください」などと呼びかけた。こうした一連の近代的児童人権運動であり啓蒙運動である方定煥の「オリニ運動」は、世界的にも先駆的な例であるとして韓国で高く評価されている。

本稿では、そうした方定煥の人物と業績、その時代背景を知る目的で、韓国における方定煥研究の第一人者である李相琴<sup>vii</sup>の名著で方定煥の評伝である『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』（ソウル：ハンリム出版社、2005）（이상금 『소파 방정환의 생애-사랑의 선물』 한림출판사）を訳出し、注釈を加えながら精読することとする。

## 2. 方定煥の誕生とその時代背景

方定煥は1899年漢城（今のソウル）に誕生した。大韓帝国の時代である。

日清戦争で清が大日本帝国に敗れ、1895年4

月17日に日清講和条約（下関条約）が締結された。これによって朝鮮王朝は長きにわたる清の冊封体制から離脱した。

方定煥が生まれた家から程近いところにはこの清との冊封関係を象徴する迎恩門があった。現在、西大門独立公園となっている場所である。迎恩門は16世紀に建てられ、300年に渡って中国皇帝の勅使を迎えてきた。しかし1896年、迎恩門は破壊され、代わりにパリのエトワール凱旋門を模倣した独立門が建てられた。同じく隣接して建てられていた中国からの使臣のための施設である慕華館も独立館に改められた。つまり、中華を慕いその恩を迎えていた時代、朝鮮王朝の王が中国皇帝の臣下であった時代は方定煥が生まれるその少し前に終焉を迎えていた。方定煥は新時代を迎える地殻変動の時代に生を受けたのである。李相琴による方定煥の評伝『愛の贈り物—方定煥の生涯』（ハンリム出版）では、方定煥の誕生と当時の生家の様子を次のように描写している。

1899年11月9日、陰暦では10月7日のソウルの空は、初冬らしく天高く澄みきった青空だった。夜珠峴（ヤジュゲ）<sup>viii</sup>から眺める北岳山（プガクサン）の花崗岩岩石は、その日に限って水ですすいだように清潔秀丽であった。小波（ソバ）・方定煥（パン・ジョンファン）が生まれた日である。

夜珠峴市場通りは早朝から人々の往来が激しく、活気を帯びる。並び立つ店舗の中で、温陽（オニャン）<sup>ix</sup>方氏の店は、米穀商と魚・果物商を兼ねたいへん大きな店構えだった。

堂々とした瓦屋根が目立ち、奥の間もたいへん広々としている。この家は二つの家の真ん中の扉を取り除いて一つの家として使っていた。この通りでは有数の豪商であることがその外観を見ても分かる。

この日の朝、店舗の主人、方漢龍（パン・ハニョン）はずっとにこにこしながら、

見事な縄を編んでいた。太くて立派な門柱に掛けられた縄には、よく干された赤唐辛子が目にしみるほど赤かった。<sup>x</sup>

「ご主人、お孫さんが生まれたのですね。おめでとございます。」

行き来する人々のあいさつを受けながら、威厳を保とうとこぼれる笑みをかみ殺して、「オホン！」と咳払いをするのに忙しかった。その年四十二歳のこの家の主人、方漢龍は夜珠峴の名士だった。

この日生まれた方定煥の父親、慶洙（ギョンス）は、やっと二十歳だった。父母や祖父母に囲まれた若い親なので、大っぴらに喜んでいられず、店の中の米俵を落ち着かぬ様子でせせせと運んでいた。

景福宮の光化門を目と鼻の先とする方氏の店は、いつからか王宮へ米と魚、果物を納品する仕事を家業として継いできており、財政がしっかりしていると夜珠峴市場では有名だった。（李相琴『愛の贈り物—方定煥の生涯』ハンリム出版、28～29頁）<sup>xi</sup>

方定煥の生家は、王宮に食材を納品する豪商だった。朝鮮王朝の正宮だった景福宮前は、現在、韓国が誇る固有文字のハングルを創製した朝鮮王朝第4代国王世宗大王の巨大な像と噴水で美しく造成された記念広場になっている。世宗大王とハングル文字を韓国の歴史と文化の求心力とする象徴的文化空間である。この広場の西側が方定煥の生家があった夜珠峴市場があったところで、現在の行政区画では唐珠洞（タンジュドン）と呼ばれている。韓国筆頭の文化ホールである世宗文化会館が目印である。世宗文化会館の並びの王宮側には政府総合庁舎があり、広場の対岸にはアメリカ大使館、景福宮の後方には大統領府の青瓦台がある。このような、現在も過去も政治の中核であった一等地に店を構える豪商の家門に方定煥は生まれたのだった。

朝鮮時代からの慣習で名家の跡継ぎは早婚だったが方定煥の父親も例外ではなかった。父

は二十歳、祖父が四十二歳のときに誕生している。男子の誕生を格別に望んだこの時代、方定煥の誕生は、家族はもちろんのこと隣近所に入りの者まで多くの人々からの祝福があったに違いない。

しかし、この方定煥が生まれた19世紀末韓国の時代背景というのは、新たな世界観が必要とされた大きな地殻変動の時代であった。これまでの中華秩序の中で安定していた東アジアの世界は崩壊し、世界列強と対峙する近代国家を樹立しなければならぬ世界史的局面に立たされていたのである。中華秩序の崩壊とは、これまで<倭>の国として中華文明から外れた野蛮な島国としてみなされていた日本が、日清戦争で勝利を収めたことに始まるが、それ以前に旧態依然とした王宮の内部の問題が噴出していた時代でもあった。李相琴は次のように述べている。

方定煥は運命的に、混乱の時代、困難な社会環境の中に生まれた。

1899年はまさに19世紀最後の年で、世紀末である。19世紀末の韓国は、まさに大変な局面に苦しんでいた。あの時代にも、世紀末の不安と恐怖を表現する特別な用語があっただろうか。

1890年代の韓国は、蜂の巣を突付いたような混乱の連続だった。開国か鎖国かをめぐった興宣大院君<sup>xii</sup>と閔妃<sup>xiii</sup>の対立は、閔妃が1895年10月8日に日本の浪人たちに殺害され<sup>xiv</sup>、大院君が1898年に79才の生涯を終えることでひとまず終わった。しかし、彼らの対立は、日本と清国の介入に口実を与えることとなり、ロシアまで入り込ませ、重ね重ね後難を残した。

高宗を信じ従うことのできない民衆が下から蜂起した東学革命<sup>xv</sup>に対し、平定する力がない高宗は日本と清国を呼び入れ、ついに1894年の日清戦争の導火線としてしまったし、その結果、清国は白旗を揚げてしまった。(李相琴、32～33頁)<sup>xvi</sup>

日清戦争に大日本帝国は勝利し、中華秩序は崩壊した。日清講和条約によって朝鮮はこれまでの清との冊封関係から離脱させられたが、自力で独立自立の道を選択したわけではなかったので朝鮮王朝は混乱した。これまでの中華秩序の中で育んできた精神構造上、非文明国の野蛮な倭人である日本人が世界史の舞台上で登場してきたことに対する生理的不快感は相当なもので、まったくもって受け入れがたい事態だったに違いない。悪評高い朝鮮の精神病理、事大主義の対象をかつての大国清からロシアに変えただけといった状況を生み出していった。

数百年の間宗主国として君臨した巨大な清国が小さい島国の日本に力なく崩れるのを見て、高宗は慌てるほかなかった。閔妃を失っているうえに親日派内閣が急造されるや日本を忌避しようと俄館播遷<sup>xvii</sup>の事態となった。

1896年2月、高宗と皇太子が一年の間ロシア公館に場所を移した俄館播遷により、ロシアも表面に出て加勢することになる。強大国は自主力を喪失した朝鮮を奪い合う角逐戦を行っていた。

ロシア公館に移った王室は、まもなく親露派内閣を構成する。これでロシアと日本の両者対決は必然となった。日露戦争は1904年2月に始まったが、米国の仲裁でポーツマス条約が締結され、1905年9月に日本の勝利に終わる。結局ロシアも日本にひざまずいた。この過程で親清派、親日派、親露派の要人が、追って追われ殺し殺され、如何に多くの血を流したのか。

備えあれば憂いなし、有備無患ではなく無備有患の結末である。(李相琴、33～34頁)<sup>xviii</sup>

### 3. 方定煥の生家と家系

ところで、19世紀末韓国の激動の時代背景の中で、方定煥誕生当時の生家は繁栄の盛りに

あった。

方氏の家系は、「温陽方氏大同譜」<sup>xix</sup>によると、新羅時代に中国から来た文化使節がそのまま留まったのが始まりである。高麗の太祖の時に武功を立てた先祖がおり、李朝の時も功勳將軍がいて、温陽一帯を下賜され、その後裔が温陽を本貫として子孫繁栄した。

方定煥の家門は中人として、本籍地は京城府堅志洞<sup>xx</sup>118番地。後に事業に失敗し、引っ越した先も社稷洞と正宮前で、やはりソウルの中心地から離れることはなかった。方定煥が成人となった後に居住したところは、嘉會洞、桂洞、昭格洞で、彼の生涯の仕事場であった開闢社は慶雲洞<sup>xxi</sup>にあった。方定煥は由緒正しい生粋のソウルっ子なのである。

家族は、当時の制度自体が大家族であったという点もあるが、農業であれ商業であれすべての業種で家族の働き手が多く必要だった時代らしく、彼の家庭も四代が同居する大家族だった。

曾祖父母の允根(ユングン)夫婦と、祖父母の漢龍(ハニョン)夫婦に仕える父・慶洙(ギョンス)と母・孫(ソン)氏、その二人の間に方定煥は四代つづいたく長孫(長男の長男)として産まれた。方定煥には二歳年上の姉がおり、直系外でも二歳年上の叔父、二歳年下のいとこがいた。

店舗は、仕事を手伝う人や、物品を運搬する人、王宮から出てくる人や一般の客でいつも忙しかった。その上家族も多いので、広い家の中はいつも大勢の人でにぎわっていた。方氏の家は、商売繁盛、子孫繁栄の気運溢れるがごときであった。

だが、慶洙の妻である水踰里の富裕層に生まれた孫氏は体が弱く、たびたび病を患いそれが心配の種であった。そんな中でも最初に娘を産み、また二歳違いで無事息子

を産んだので皆一安心だった。方定煥は家族の祝福の中に生まれ、すくすくと成長した。(李相琴、29～30頁)<sup>xxii</sup>

#### 4. 恵まれた幼少期

また、方定煥の生家は商売で成功していただけでなく、学問の造詣も深かった。そのため方定煥も幼いうちから教育に恵まれた。

方定煥の祖父である漢龍は、商人であるが学問に造詣が深く、父・慶洙も学問を修めた。

方定煥は五歳のときから祖父の指導で千字文を読んだというが、11月に生まれて二ヶ月もたたないうちに数えて二歳になったのだから、満三歳の時のことである。舌足らずの発音で千字文をすらすら覚える姿は家族の目にあっぱれなだけでなく、他人の目からも神童に見えたことだろう。

店舗に出入りする人々が、「こいつはまったく賢い奴だ」とお金をくれたりもした。

方定煥は人にほめられるのが嬉しくてさらに一生懸命になって千字文を読んだ。

家でかわいがられ、町内でもかわいがられた。菓子だろうが果物だろうがどの店でもつまみ食いしようとして叱られるどころか大歓迎された。というのも後で祖父が、付けておいた代金を間違いなく支払っていたからである。

家庭で大切にされる子どもは外でもかわいがられるというが、大人だろうが子どもだろうが人々はよくしてくれるから、方定煥は憚りのない腕白なガキ大将に育った。

大人になってから、彼が幼い頃の回顧を雑誌『オリニ』<sup>xxiii</sup>に数回連載したのを見ると、馬の尻尾ですずめをつかまえる罌を作ろうとお母さんのお針箱からはさみを取り出して店の前に止まっている馬車の馬の尻尾にあてたところ、後ろ足でおもいっ

きり蹴っ飛ばされた話が出てくる。幸い大怪我はしなかったが、まったく無鉄砲ないたずらっ子だった。

また、普成小学校に初めて入学したときのエピソードとして、校長先生の家に行って頭を剃ってきた話もある。男の子も髪の毛をおさげ頭に結って通り、髪の毛を命のように大切にしていた時代である。

1905年に新設された新式学校の普成学校に二歳年上の叔父が通っているのがうらやましくて、家族に秘密で叔父の後をついて行ったら、校長先生が学校に通いたければ頭を丸めなくてはならないというので、すぐさま丸めますと答えた。祖父母が大変可愛がっていたお下げ頭を校長先生が言うとおりにぱっきり切ってしまったのだ。七歳の時のことだから、満で五歳。幼い子どもの言うことだけを聞いて髪を切ってしまった大人の行動にも、その時代の常識を推測すれば首をかしげたくなるが、方定煥の大胆なことにも驚かざるをえない。

その日は祖父にあざができるほどふくらはぎを叩かれ、祖母が号泣したという話も伝えられている。幼い方定煥のこのような行動は、いつも大抵のことは何の制裁も受けずに育った、いたずらっ子気質の反映であろう。とにかく方定煥の幼児期はひたすら豊かで楽しく幸せだった。(李相琴、30～32頁)<sup>xxiv</sup>

## 5. 自主独立、自由民権の風潮

方定煥の幼少期は、家庭的には恵まれた環境の中で過ごすことができた。一方で、もう一度この時代の様相を別の角度から俯瞰してみたい。混乱を極めた朝鮮王宮の外では、意志あるエリートたちが立ち上がっていった時代でもあったのである。朝鮮の地を離れ外国に学び、広い世界と近代の精神を知った留学生たちの活躍があった。『独立新聞』の発刊や、独立門の建立など自主独立を掲げた政治的行動が王宮の外部

で生まれていったのである。

徐載弼(ソ・ジェピル)<sup>xxv</sup>、尹致昊(ユン・チホ)<sup>xxvi</sup>など、アメリカ留学生らが中心となって、1896年には「自主独立、自由民権、自強改革」を掲げて独立協会<sup>xxvii</sup>を結成し、『独立新聞』<sup>xxviii</sup>を発刊した。清国の使節を出迎えるために建設された迎恩門<sup>xxix</sup>と、彼らを供応した慕華館があった場所に独立門と独立館を建てた。過去、あまりに長い歳月の間民族の胸のしこりとなっていた侮蔑感の塊がずっとおける快事であった。日本にもロシアにも依存しない自主的な改革と独立を主張する独立協会の旗印は新しい風を吹き込んだし、彼らは早くも政治団体に成長していった。

しかし、独立協会が掲げた独立とか自由とか平等とかいう新鮮なスローガンは、旧勢力には脅威に違いない。高宗はむしろ彼らを弾圧した。結局、独立協会は二年半後の1898年には解散させられてしまった。

この時期、全国各地で起きた義兵は、まだどれくらいくやしい血を流したことか。「鯨の争いに猫が逆毛をたてる」というが、王室も民衆もバラバラに分裂していった。(李相琴、34頁)<sup>xxx</sup>

## 6. 愛国啓蒙運動の時代

独立協会が掲げた〈独立・自由・平等〉という新しい世界観は、外国からの圧力で押し潰されたのではなく、朝鮮内部の旧勢力による弾圧に起因する分裂であったことが悲劇である。それに加え、世界史の新しい局面でこれまでの東アジア世界の中華秩序を覆し頭角を現した新日本の積極的な干渉があった。亡国の危機に直面した朝鮮憂国の志士たちは、最初は義兵蜂起などの抗争で抵抗していたが、いち早く近代化を取り入れた大日本帝国の国力に到底及ばない朝鮮の前近代的な実情に気づくや、所謂愛国啓蒙運動<sup>xxxi</sup>を始めていく。なかでも教育の重要性

が自覚され、数々の私立学校が設立されていった。

日本は長い鎖国の終わりに自ら開港し、半世紀も経たないうちに清とロシアを相手に速戦即決の全勝をおさめた。驚くべき結末だった。

これで日本は、計画どおり朝鮮を飲み込むだけとなった。彼らは急いだ。色々な脅迫をして韓日議定書<sup>xxxii</sup> 調印を行い、続いて朝鮮を保護国化<sup>xxxiii</sup> して統監部<sup>xxxiv</sup> を設置したのが1906年2月である。外交権を奪い取って経済権と警察権を掌握し、名前だけの大韓帝国<sup>xxxv</sup> を作って案山子として利用した。

痛憤と自責から愛国の志士たちの自決が相次いだし、人々の心を極度に消沈させた。夜が明けるたびに衝撃と不安が増加していった。

あちこちで義兵蜂起があったが、新式武器で武装した日本軍には対抗できなかったし、統監部は強制的に我が国の軍隊を武装解除させてしまった。ゲリラ式抗争にも限界があったし、犠牲者だけが増えていった。義兵は、北へ北へと北上し、北間島に独立軍の拠点を作ることになる。

この時期に民衆たちが骨に凍みるほど感じたことは、我々の無知であった。19世紀末から開化運動家たちは、「知は力だ。学んでこそ生きられる！」と叫んできた。いわゆる啓蒙運動だ。韓日合邦（韓国併合）<sup>xxxvi</sup> に至るまで、義兵運動と共に全ての同胞に広がったのが「愛国啓蒙運動」だった。経済的自立運動、政治社会団体活動、報道機関の啓蒙活動、民族教育運動など多様な活動が展開する。数ある中でも、統監部が設置されて具体的な侵略が見え始めるや、人々は一步遅れたが教育の必要性を痛感するようになる。

そして学校設立を急いだ。草原の火のよ

うに教育運動が展開し始めた。もちろん皆私立学校で、施設や教材がまともに取り揃わないところも多く、ただ歌を歌って軍隊式訓練をして抗日意識を高揚させるような所も多かった。

一方、この時期を前後して設立された普成、徽文、中東、真明、淑明、大成、呉山、同徳等、数多くの私立名門学校が生まれたし、以前から旺盛に普及してきたキリスト教系の学校設立も顕著に増加した。これらに対して、韓国教育史では「教育救国主義私立学校運動」と呼んでいる。（李相琴、34～36頁）<sup>xxxvii</sup>

## 7. 教育救国主義私立学校運動と方定煥が学んだ学校

韓国の歴史観の中で、近代史における「教育救国主義私立学校運動」は重要な意味を持っている。旧体制の崩壊と新しい世界史の流れの中で、亡国の危機に立たされた朝鮮民族は自主独立の意志と抗日意識を新しい教育の中で高揚すべく、教育救国主義私立学校運動として具体的に取り組んだ。方定煥はこうした民族運動の一環として設立された名門私立学校である普成小学校に入学した。

方定煥が普成小学校に入学したのは1905年のことだ。その年に新設された普成小学校は高宗の信任が厚く親露派だった李容翊（イ・ヨンイク）<sup>xxxviii</sup> が設立した。

李容翊は壬午軍乱（1882年）<sup>xxxix</sup> の時、閔妃と姑従の間を連絡する隠密な使者であった。閔妃が還宮した後重用されたことは言うまでもない。閔妃死後にも高宗の最側近として重責に起用されたし、1904年当時、彼は国の財政の責任を負う大臣の重責に就いていた。

しかし、李容翊はロシアに近いことから日本側から見れば邪魔な存在にならざるをえなかった。

1904年2月から乙巳五條約<sup>xi</sup>の先行過程として韓日議定書の本格的な交渉が始まるや、李容翊はずっと反対を主張し続け、その月の22日に強要された署名を拒否した。李容翊はその日の夜のうちに日本に連行され、名目は遊覧だったが十ヶ月間軟禁された。もちろんすべての官職も剥奪された。帰国することになった李容翊は普成小学校を設立し普成社という印刷所を建てて教育と文化事業に注力しようとしたが、結局ウラジオストックに亡命することになる。

この時期に学校を建てるということは、まさに独立運動であり、民族運動であった。これを日本がだまっただけで見ているだろうか。1908年、統監部時代の私立学校令と、1911年の朝鮮総督府の第一次朝鮮教育令<sup>xii</sup>によって、私立学校運動は厳しい霜に当たったように半数以上が門を閉めた。

方定煥は七才（満五才）の年齢で普成小学校幼稚班に入り、全校で一番若い学生だった。その時期を回顧した方定煥の文は、滑稽でおもしろいエピソードで埋まっている。

もっとも、幼い彼が歴史の裏側を分かんはずがない。少なくとも普成小学校に通った2～3年の間は、方定煥の家は夜珠峴の金持ちであり、町内の人気者だったので日々楽しかっただろう。しかし、彼の湯飲み茶碗の中の幸福は、家族も国も守ることができない時代の荒波の中に巻き込まれていていた。（李相琴、36～37頁）<sup>xiii</sup>

## 8. 方定煥生家の没落

1905年9月、ポーツマス条約が締結され、日露戦争は日本の勝利に終わった。続く11月には第二次日韓協約を結び大韓帝国を実質的に保護国とした。こうした時代の荒波に方定煥の生家も飲み込まれ、幸せだった幼い頃の生活は一変する。

1907年、夜珠峴の堅実な金持ちが無一

文の乞食になる日が来た。曾祖父の事業失敗とも祖父の新しい事業の失敗とも記録されているが、家の大人たちが始めた事業が失敗したと推察される。借金まみれになり、やっといく枚かの布団と台所道具だけを持って社稷洞正宮前のみずぼらしい藁ぶきの家に移った。

高麗時代から続き、旧韓末<sup>xiiii</sup>には宮廷の前に店を構え王室に納品もしながら堅実な本物の金持ちとなった温陽方氏の店ではないか。何の記録もないが王室の没落と全く関係がないわけではないようだ。

閔妃が殺害され、引き続き俄館播遷以後一年間は王室の住まいは慶運宮<sup>xv</sup>となった。ながらく王室との取引があった方氏の家はこのような変化に格別な感覚を持っていただろう。

日清・日露両戦争に勝利した日本はいち早く朝鮮を侵略していったが、まずは王室に対する攻略から始まった。高宗の首をだんだんと締めていった統監・伊藤博文が決定打を打った。ハーグ特使事件<sup>xvi</sup>だ。

1907年6月にオランダのハーグで開かれた第二回万国平和会議に高宗がイ・ジュン、イ・サンソルの二人の密使を送った。ここにロシア公使館のイ・イジョン参事官が合流して、これら三人は参加国代表たちに韓国問題を扱ってもらうことを依頼する。これが発覚するや伊藤博文はその責任を問い、7月には高宗を強制的に譲位させてしまう。

大韓帝国はすでに外交権を剥奪された後だったが、日本の不法行為と乙巳五條約の無効化を世界列強に訴えようとする高宗の苦闘だった。一筋の希望をかけた計画は水泡と消え、王室の没落は加速化される。

軍隊が解散されたのも同じ年だ。日々ガラガラと国の軸が崩れる音が聞こえてくるようだった。方氏一族もこれと時を同じくし崩壊した。

方定煥があどけなく夜珠岨通りを飛び回っていた時、家の大人たちは王室との取引も難しくなっていき、日本人商人の進出で日に日に状況は悪くなり不安な日々が続いた。生きる道を探して新しい転機を作らなければならなかった。そうするうちに何らかの事業に投資したのだろう。新しい事業の失敗で、一日で家は雷に打たれたように粉々に碎ける始末となってしまった。

方定煥の祖父と父は印刷所で仕事をするようになったが、家族を扶養するのは手に余ることだった。飢えているのが当たり前のような日が続く。

方定煥の幼少期を回顧した文には腹が減った佝僂しさが切々と記録されている。弁当なしで学校に行き、他の子どもたちが昼食を食べる時間に一人で手洗いの後に隠れるようなこともした。なぜ、わざわざ臭いにおいのする手洗いの後ろになんかいたのだろうか。空っぽの運動場に適当な場所がなかったのか、でなければ誰の目にもつかない場所がそこしかなかったのか。

一時学校に行く道すがら大叔母の家に立ち寄りご飯も食べて、その家で弁当まで包んでもらったことがあったが、解決策にはならなかった。この家、あの家、米を借りに通うのも方定煥がしなければならぬし、家に井戸がないから町内の井戸から水を汲むのも彼がしなければならぬ仕事だった。(李相琴、37～39頁)<sup>xvii</sup>

この時期に方定煥が味わった貧困と苦勞、特に水汲みの仕事のつらさを方定煥本人は次のように回想している。

米を借りに通うこと、質屋に通うこと、その他もう一つ苦しかったことは水を汲んでくることでした。使用人もなく、大人たちは活版所に行き、また叔父は他人の商店の店員として働き、水を汲んでくる人は

たった十才の私と、わずか八才のいとこしかいませんでした。

家が社稷洞だったから、我が家から停留所で2～3駅ほど離れた社稷洞の後方の堀の下に星州井戸という井戸があって、学校から帰ってくると水桶の石油缶一つをぶらりと下げて行き、十才と八才の二人が水を汲んでふらふらしながら家に運ぶ仕事が多かれだけ大変なことか……、

「さあ八回目だ、さあ九回目だ、残すはあと三回だ。」といいながらふらふらしながら運ぶ時間はとても長かったです。

まだ夏は格別苦勞はなかったけれども、冬になると水が出てこなくて底の方に少しづつしか出てこないで水騒動がおきるような状況で、井戸の前に来た者順に器をちょこちょここと並べて待ち、自分の順番になるとひさごを持って井戸の中に入り込んで行ってすくって出て来ることになるので、井戸の前には水桶と水甕が路地の外にまで体操する兵丁のように増えていったものです。自分の番が来るのを待つのが二時間にもなりました。

日は暮れて風は肉を切るように吹きさらし、腹は減って体は震え……、井戸の傍で両足をばたばたさせて泣いたことが毎年冬が来るたびに何百回あったか分かりません。(1928年『オリニ』6巻3号)<sup>xviii</sup>

## 9. 童謡「きょうだい星」の逸話

方定煥の生家は、朝鮮王朝とその命運を共にした。方定煥が生まれて10年余りたった1910年には、ついに韓国併合の憂き目を見ることになってしまった。王宮の斜陽とともに方定煥生家の家運も傾き、生活は困窮を極めた。

方定煥が書いた初めての童謡は「きょうだい星」だが、この詩のモチーフは、このころの方定煥自身の困窮した生活と悲しい家族の思い出であるといわれている。



この時期に最もわびしかったことは、二才上の姉が十二才の年齢で嫁に行くことになったことだ。口減らしのための窮余の策だった。方定煥は大人になった後にもこの姉との悲しい離別を忘れることはできなかった。

方定煥が初めて作った童謡は「きょうだい星」だ。

日暮れの空に 星の三きょうだい  
きらきら仲良くしてたのに  
どうしたのだろう 星一つ見えなくなって  
残った星は 涙を流す

この童謡は、日帝時代に故郷を背にして見慣れぬ土地を流浪する民族の哀愁を歌ったと言われるが、方定煥の悲しい家族の事情が底辺に敷かれているという説が説得力を持って伝えられている。ここで見えなくなった一つの星は嫁入りした姉で、残った星は母親と方定煥のことである。病弱なお母さんの看病を引き受けていた姉が去った後、母親の世話をするのも方定煥の役割となった。

そんな渦中にも幸いだったことは方定煥が学校に通えたことだ。うとうとと船をこぎ、いびきをかきながら勉強するということがどれほど大変だったか分からないが、子どもたちは学ぶべきであるという方家の必死な努力があり、またこれはその時代の民族の課題でもあった。(李相琴、40～41頁)<sup>xlviii</sup>

## 10. おわりに

本稿では、方定煥の誕生から10歳までの幼少期の生育環境と時代背景を考察した。

方定煥は、1919年の3・1独立運動主導者の一人である天道教教主孫秉熙(ソン・ビョンヒ)<sup>xlix</sup>の娘婿である。天道教はもともと東学といい、1894年の甲午農民戦争(東学党の乱)

では孫秉熙も戦っている。その後孫秉熙は独立協会の人物たちと交流し、農民運動、開化派近代化運動のリーダーとして活動した。しかし、独立協会や東学は旧勢力から弾圧されたので、孫秉熙は1901年に日本へ亡命する。そこで明治維新以後近代化した東京を目にし、朝鮮の内政改革や近代化、人材育成の必要性を説くようになる。

1905年には東学は天道教と改称され、方定煥も、天道教の熱心な信者であった実父の關係で入信することになる。そして天道教少年会を発足させ、そのリーダーとして少年運動を推進していく。

このような關係から、方定煥も3・1独立運動にかかわり、1920年には憲兵から逃れるように東京へ留学していった。そして留学先の東京で、当時隆盛していた日本の『赤い鳥』などの児童文芸誌や童話、童謡といった児童文化に触れ、韓国初の単行本童話集『愛の贈り物(サランエソンムル)』<sup>1</sup>を刊行し、韓国初の本格的児童文芸誌『オリニ』を創刊していくのである。

これらの一連の流れや方定煥を中心としたその家族や親族、周辺の人物を眺めただけでも、彼によって始められた韓国初の児童文学運動やオリニ運動は、朝鮮王朝末期の農民運動や開化派近代化運動、大日本帝國統治下の民族独立運動と無關係に考察することはできないことが理解できる。さらに、方定煥が天道教教主孫秉熙の娘婿であり、天道教少年会の活動が彼の少年運動の始まりだったことは、東学や天道教という宗教団体の教理や世界観、人間観の考察抜きに彼の児童観や業績を評価することはできないことを意味している。

以上の事から、筆者は、韓国児童文学の成立過程を知るうえで、方定煥研究、なかでもその伝記的研究が重要であると考えている。

韓国児童文学の父である方定煥は、朝鮮王朝が崩壊していく動乱期に誕生した。アジアの秩序に固執する旧勢力は、世界史再編のうねりの中で大きな変革を迫られ、しかし結局は一足先

に西洋的近代化を遂げた大日本帝国に併合されることになる。方定煥の生家は朝鮮王朝と命運を共にし、誕生時の繁栄は、王家の没落と共に急速に斜陽した。就学する頃の方定煥はたいへんな貧困を味わったのである。そのため、感傷的で「涙主義」と呼ばれた方定煥の文学が生まれたのであろう。彼の文学は、植民地下の民族文学であると同時に、時代の荒波にのみ込まれた自身の家庭を描いた私小説でもあったのである。こうした理解を得るためにも、方定煥研究における伝記的考察は意義深いものといえるだろう。

\* 本研究は、日本学術振興会科学研究費（基盤研究(c)）、(課題番号：24520409)による研究成果の一部である。

## 参考文献

- ・李相琴『小波・方定煥の生涯——愛の贈り物』(ソウル：ハンリム出版社、2005)  
(이상금『소파 방정환의 생애-사랑의 선물』한림출판사)
  - ・李相琴「方定煥と「オリニ」誌—「オリニ」誌刊行の背景—」、大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集 1995～1996』1997
  - ・李相琴「日本と韓国にかけける児童文化の橋～韓国オリニ文化をとおして考える～」、大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集 1995～1996』1997
  - ・李在徹『韓国現代児童文学史』ソウル：一志社、1978  
(이재철『한국현대아동문학사』일지사)
  - ・李在徹『韓国児童文学作家論』ソウル：一志社、1983  
(이재철『한국아동문학작가론』개문사)
  - ・李在徹「児童雑誌『オリニ』研究」、『韓国児童文学研究』ソウル：啓蒙社、1983  
(이재철「아동잡지 '어린이' 연구」, 『한국아동문학연구』개문사)
  - ・李在徹「韓国児童文学の歴史と現状」、児童文学者協会『日本児童文学』1990年6月号
  - ・李在徹「1920年代の韓半島の児童書——児童雑誌を中心にして」、『子どもの本・1920年代展図録』1991
  - ・李在徹「韓日児童文学の比較研究(1)」、大阪国際児童文学『外国人客員研究員 研究報告集 1989～1990』1993
- 
- <sup>i</sup> 1971年に40周年を記念してソウルの中心にある南山公園に立てられたが、1987年5月3日にオリニ大公園に移転された。
  - <sup>ii</sup> 1923年3月～1934年7月、通巻122号、開闢社
  - <sup>iii</sup> 1919年1月～詳細は原本散逸のため未解明
  - <sup>iv</sup> 1923年9月～1934年4月、通巻38号、開闢社
  - <sup>v</sup> 1929年3月～1930年1月、開闢社
  - <sup>vi</sup> 1922年5月1日創設。現在の「オリニナル」は、1975年に5月5日(国民の休日)に制定された。
  - <sup>vii</sup> 1930年～。元梨花女子大学校幼児教育学科教授。
  - <sup>viii</sup> 現在の唐珠洞(タンジュドン)。景福宮の目の前にある光化門広場に面した世宗文化会館のある一角。景福宮、慶熙宮、徳寿宮に囲まれたエリアで、ソウルの一等地である。
  - <sup>ix</sup> 忠清南道温陽。古くから温泉地として有名。
  - <sup>x</sup> 韓国では伝統的に子どもが生まれると家の門に縄を張り、男の子の場合唐辛子をぶら下げて周囲に男児が誕生したことを誇り、厄除けと新生児がいる告示をする風習がある。
  - <sup>xi</sup> (原文)  
1899년 11월 9일, 음력으로는 10월 7일의 서울 하늘은 초겨울답게 드높고 해맑았다. 야주개(지금의 당주동)에서 바라보이는 북악산의 화강암 암석은 그 날 따라 물에 씻은 듯 정갈하고 수려하였다. 소파 방정환이 태어난 날이다.  
야주개 시장거리는 이른 아침부터 사람들

의 왕래가 분주하고 활기를 띠기 시작한다. 즐비한 점포들 가운데 온양 방씨 가게는 미곡전과 어물전을 겸하여 제법 큰 터를 잡고 있다.

당그런 기와지붕이 돋보이고 안채의 칸살이도 만만치 않게 널찍해 보인다. 이 집은 두 집의 가운데 담을 터서 한 집으로 쓰고 있었다. 이 거리에서는 손에 꼽힐 부상임이 걸으로도 드러나 보인다.

이 날 아침 점포의 주인 방한용方漢龍은 연방 싱글벙글 하면서 탐스럽게 엮어진 금줄을 치고 있었다. 듬직하게 굵은 문설주에 이어진 금줄에는 잘 말린 햇고추가 눈이 시리게 붉다. “영감님 손주 보셨군요. 축하합니다.”

오가는 사람들의 인사를 받으면서 위엄을 차리느라 터지는 웃음을 깨물고 ‘어흠’ 하고 헛기침으로 답하기에 바쁘다. 당해 마흔 두 살의 이집 주인 방한용은 야주개의 터줏대감이다.

이 날 태어난 정환의 아버지는 경수慶洙는 이제 스무 살이다. 충충시하의 젊은 애아범이라 걸으로 희색은 드러내지 못하고 가게 안의 쌀가마를 신명나게 번쩍번쩍 들어 옮기고 있었다.

경복궁 광화문을 코앞에 둔 방씨의 가게는 언제부터인가 대궐에 쌀과 어물을 납품하는 일을 가업으로 이어왔고 야주개 시장 거리에서는 재정이 튼실하기로 소문이 나 있었다.

xii 興宣大院君、1820年12月21日-1898年2月22日。1864年1月から1873年11月まで、朝鮮王朝第26代国王高宗の実父として幼年の高宗の代わりに国政を執った。鎖国主義者でキリスト教を弾圧。高宗の王妃、閔妃との激しい対立で有名。

xiii 1851年10月19日-1895年10月8日。朝鮮王朝第26代国王高宗の妃。明成皇后。大院君との対立、清やロシアへ依存する事大主義、国費浪費の末、1895年の乙未事変で暗殺される。

xiv 乙未事変。1895年10月8日。景福宮にて閔妃が暗殺された。

xv 甲午農民戦争。1894年（甲午）に起きた農民（東学信者）による内乱。東学党の乱。

xvi (原文)

방정환은 운명적으로 어지러운 시대 어려운 사회환경 속에 태어났다.

1899년은 바로 19세기의 마지막 해이며 세기말이다. 얼마 전에 20세기를 보내면서 밀레니엄이다 Y2K다 하여 온 세계가 떠들썩하게 세기말을 보낸 기억이 새롭다. 19세기 말의 우리 나라는 참으로 힘든 국면에서 허덕이고 있었다. 그 시절에도 세기말의 불안과 공포를 표현하는 특별한 언어가 있었을까.

1890년대의 한국은 별집을 쭈서 놓은 듯한 혼란의 연속이었다. 개국이나 쇄국이나를 두고 오랫동안 대원군과 민비 사이의 엇치락 뒤치락의 대립은 민비가 1895년 10월 8일에 일본 낭인들에게 시해되고 대원군이 1898년 79세의 생애를 마치는 것으로 일단 끝났다. 그러나 그들의 힘겨루기는 일본과 청국의 개입에 빌미를 주었고 러시아까지 기웃거리게 만들어 두고두고 후환을 남긴다.

조정을 믿고 따를 수 없었던 민중이 아래로부터 봉기한 동학혁명에 대하여 평정할 힘이 없는 조정은 일본과 청국을 불러들여 마침내 1894년 청일전쟁의 도화선이 되게 하였고 그 결과 청국이 백기를 들고 말았다.

xvii 露館播遷、1896年2月11日-1897年2月20日。高宗はロシア公使館に避難し朝鮮王朝の執政をとった。

xviii (原文)

수 백년 동안 중주국으로 군림한 거대한 청국이 작은 섬나라 일본에 힘없이 무너지는 것을 보고 조정은 당황할 수밖에 없었다. 민비를 잃은 데다가 친일파와 내각이 급조되자 일본을 기피하려고 ‘아관파천’이란 사태가 이루어진 것이다.

1896년 2월에는 친러파에 의해 고종과 왕세자가 1년 동안 러시아 공관에 옮겨 앉은 ‘아관파천’으로 인해 러시아도 표면에 나서게 된다. 강대국들은 자주력을 상실한

조선을 통채로 서로 먹겠다고 주변을 돌면서 각축전을 벌이고 있었다.

러시아 공관에 옹긴 왕실은 곧 친러파 내각을 구성한다. 이제 러시아와 일본의 양자대결은 필연의 과정이 되었다. 러일전쟁은 1904년 2월에 시작되었으나 미국의 중재로 ‘포츠머스 조약’이 체결되어 1905년 9월에 일본의 승리로 끝난다. 결국 러시아도 일본에 무릎꿇었다. 이 과정에 친청파, 친일파, 친러파의 인사가 쫓고 쫓기고 죽이고 죽임을 당하고 얼마나 많은 피를 흘렸던가.

유비무환有備無患이 아니라 무비유환無備有患의 결말이다.

xix 「族譜」と呼ばれる親族集團の家系に関する文書。

xx 曹溪寺と仁寺洞の間にある一角。

xxi 天道教中央大教堂がある一角。

xxii (原文)

방씨 가계는 <온양방씨대동보>에 의하면 신라시대에 중국으로부터 온 문화사절이 그대로 뿌리내려 머문 것이 시초가 된다. 고려 태조 때 무공을 세운 선조가 있었고 이조 때도 공훈장군이 있어 온양일대를 하사 받았으며 그 후세들이 온양을 본관으로 삼아 자손들이 번성하였다.

방정환의 가문은 증인으로서 본격지는 경성부 견지동 118번지. 후에 사업에 실패하여 이사하게 된 곳도 사직동 도정궁 앞이었으니 역시 문 안에 머물고 있었다. 정환이 성인이 된 후 거주한 곳은 가회동, 계동, 소격동이었고 그의 평생의 일터 개벽사는 경운동에 있다. 방정환이야말로 서울토박이 중에 진골 토박이다.

가족은 당시의 제도자체가 대가족이란 점도 있었지만 농업이든 상업이든 모든 업종에 가족의 일손이 많이 필요한 시대인만큼 그의 집안도 4대가 함께 사는 대가족이다.

윤근允根 내외 증조부모와 한용 내외 조부모를 위로 모시는 아버지 경수와 어머니 손씨,

그 사이에서 방정환은 4대째 장손으로 태어났다. 정환에게는 두 살 위의 누나가 있었고 직계 외에도 두 살 위인 삼촌, 두 살 아래 사촌 동생도 있었다.

점포는 일을 돕는 일꾼, 물건을 실어 오고 실어 나르는 마차꾼, 궁궐에서 나온 사람과 일반 손님들로 언제나 붐비고 있었다. 게다가 안살림도 식구가 많아서 넓은 집안에 항상 사람이 북적거린다. 방씨네 집은 안팎으로 번창하는 기운이 넘치는 듯 하였다.

다만 경수의 아내로 수유리 정미소 부자집 안에서 맞이한 손씨는 몸이 실하지 못하여 자주 앓는지라 그것이 근심거리였다. 그러던 터에 첫딸을 낳고 이제 두 살 터울로 무사히 아들을 낳았으니 모두 한시름 놓았다. 정환은 가족들의 축복 속에 태어났으며 다행히 별 탈 없이 자랐다.

xxiii 近代韓国初の本格的児童文芸誌。月刊誌。方定煥主筆。1923年3月—1834年7月、開闢社。

xxiv (原文)

정환의 할아버지 한용은 상인이지만 한문에 조예가 깊었고 아버지 경수도 한문 수업을 한 터이다.

정환은 다섯 살부터 할아버지의 지도로 천자문을 읽었다고 하는데 11월에 태어나서 두 달도 채 안되어 두 살이 된 셈이니까 요새 나이로는 만 세 살 때였다. 옛된 발음으로 천자문을 줄줄 외는 모습은 가족들 눈에 대견할뿐 더러 남의 눈에도 무척 신통했으리라.

점포에 드나드는 사람들이 ‘그놈 참 똑똑하다’ 하고 돈을 쥐어주기도 하였다.

정환은 사람들의 칭찬에 신이 나서 더 열심히 천자문을 읽었다.

집안의 귀염둥이는 동네에서도 귀한 대접을 받았다. 과자이건 과일이건 아무 가게에서나 마음대로 집어먹어도 나무라기는커녕 대환영이었다. 할아버지가 그들이 치부해 놓은 외상값을 틀림없이 갚아 주기 때문이다.

집안에서 귀하게 도는 자식은 밖에서도 귀

엄을 받는다더니 어리고 아이고 할 것 없이 사람들이 잘 대해 주니까 정환은 거리낄 것 없이 골목에서는 대장 노릇, 개구쟁이 노릇도 빠지지 않았다.

어른이 된 다음 그가 어린 시절의 회고를 <어린이> 잡지에 몇 차례 실은 글을 보면 말총으로 참새 잡는 올가미를 만들려고 어머니 반질고리에서 가위를 집어내어 가게 앞에 선 마차의 말 쏜지에 갖다 대었다가 뒷다리로 실컷 채인 얘기가 나온다. 다행히 크게 다치지지는 않았지만 참으로 천방지축의 장난꾸러기였다.

또 보성소학교에 처음 입학할 때의 에피소드로 교장 선생님 댁에 가서 머리를 깎은 이야기도 있다. 남자 어린이도 땡기머리를 땡고 다니며 머리채를 목숨처럼 아끼던 시절이다.

1905년에 신설된 신식학교 보성소학교에 두 살 위의 삼촌이 다니는 것이 부러워 가족들 몰래 삼촌의 뒤를 밟아 학교에 따라갔다가 교장 선생님이 학교에 다니려면 머리를 깎아야 한다니까 선뜻 깎겠다고 대답한다. 할아버지 할머니가 애지중지하는 머리채를 교장 선생님이 하자는 대로 싹둑 잘라버린 것이다. 일곱 살 때니까 만으로는 다섯 살이다. 어린아이 말만 듣고 머리를 자른 어른의 행동에도 그 시절의 상식으로 짐작해 볼 때 고개가 가웃해지지만 정환의 당돌함에도 놀라지 않을 수 없다.

그 날 할아버지에게 멍이 들게 종아리를 맞았고 할머니가 통곡을 했다는 이야기도 전해진다. 어린 정환의 이러한 행동은 평소에 어지간한 일은 아무 제재도 받지 않고 자란 개구쟁이 기질의 반영이라고 보아진다. 아무튼 정환의 유아기는 나름대로 마냥 풍족하고 즐겁고 행복했다.

xxv 1864年1月7日-1951年1月5日。開化派(獨立黨)として金玉均、朴泳孝らともに活動。慶應義塾大学で日本語を学び、獨立協會を設立。『獨立新聞』を刊行する。

xxvi 1865年1月16日-1945年12月8日。獨立協會で活動。『獨立新聞』2代目社長。

xxvii 1896年-1898年。開化派運動団体。徐載弼

創設。立憲君主制導入を目指した。

xxviii 1896年-1899年。ハンゲルのみ(一部英語)で書かれた初の新聞。徐載弼創刊。獨立協會の機関誌。

xxix 中国皇帝の使者を迎える門で、朝鮮が中国の冊封国であったことを示す門。1536年建設の迎詔門を経て1539年に名称変更し迎恩門とする。日清戦争後の1895年下関条約で清との冊封関係から独立したことを機に獨立協會によって取り壊され代わりに獨立門が建てられた。

xxx (本文)

서재필 윤치호 등 미국유학생들이 중심이 되어 1896년에는 ‘자주독립, 자유민권, 자강개혁’을 내걸고 독립협회를 결성하여 <독립신문>을 발간하였다. 청국의 사신을 영접하기 위해 건립된 영은문迎恩門과 그들을 향응하던 모화관慕華館자리에 독립문과 독립관을 세웠다. 지난 긴긴 세월 동안 민족의 가슴에 응어리진 모멸감의 체증이 확 내리는 쾌사였다. 일본에도 러시아에도 의존하지 않는 자주적인 개혁과 독립을 주장하는 독립협회의 기치는 새바람을 불어넣었고 그들은 말빠르게 정치단체로 성장해 갔다.

그러나 독립협회가 내건 독립이니 자유니 평등이니 하는 신선한 구호는 구세력들에게는 위협이 아닐 수 없다. 한국 조정은 오히려 그들을 탄압하였다. 결국 독립협회는 1898년 말 2년 반만에 해산당하고 만다.

이 시기에 전국각지에서 일어난 의병들은 또 얼마나 억울한 피를 흘렸는가. 고래싸움에 새우등 터진다더니 왕실도 민중도 갈기갈기 터지고 찢겨 나갔다.

xxxi 民族獨立のための運動。主に言論、出版、教育によって民族意識を高揚し、獨立のための啓蒙運動を行った。

xxxii 日韓議定書。1904年2月23日、日本と大韓帝国との間で締結された条約。日露戦争中に調印され、日本側の韓国施政忠告権などが含まれる。

xxxiii 第二次日韓協約(乙巳條約、日韓交渉條約、日韓保護條約。1905年11月17日締結。)によって大韓帝国の外交権はほぼ大日本帝国に接収され、事実上保護国となった。

xxxiv 第二次日韓協約に基づき設置され、韓国併合で朝鮮総督府が設置されるまで置かれた。初代統監は伊藤博文。

xxxv 1897年10月12日、朝鮮国から大韓帝国に改称し、高宗が皇帝に即位。1910年8月29日、韓国併合により消滅。

xxxvi 1910年8月29日、韓国併合ニ関スル條約により大日本帝国が大韓帝国を併合。1945年8月15日の日本の敗戦(韓国では<解放>)まで日本統治時代が続いた。

xxxvii (本文)

일본은 그들 자신이 오랜 쇠국 끝에 개항한 지 반세기도 못되는데 청국과 러시아를 상대로 속전속결의 전승을 거둔 것이다. 놀라운 결말이었다.

이제 일본은 계획대로 조선을 먹어치울 과정만 남았다. 그들은 서둘렀다. 갖은 협박으로 한일의정서 조인에 이어 조선을 보호국화하고 통감부를 설치한 것이 1906년 2월이다. 외교권을 빼앗고 경제권과 경찰권을 장악하여 이름뿐인 대한제국을 허수아비로 만들어 갔다.

통분과 자책으로 애국지사들의 자결은 잇달았고 사람들의 마음을 극도로 소침하게 만들었다. 날이 새면 날마다 충격과 불안이 더해 갈 뿐이다.

곳곳에서 의병들의 봉기가 있었으나 신식 무기로 무장한 일본군과 대적할 수 없었고 통감부는 강제로 우리군대를 무장해체시켜 버렸다. 게릴라식 항쟁도 한계가 있었으며 희생자만 늘었다. 의병은 북으로 북으로 올라가 북간도에 독립군의 거점을 만들게 된다.

이 시기에 민중들이 빠져리게 느낀 것은 우리의 무지였다. 19세기 말부터 개화운동가들은 ‘아는 것이 힘이다. 배워야 산다!’를 외

쳐 왔다. 이른바 계몽운동이다. 한일합방에 이르기까지 의병운동과 함께 온 겨레로 확산된 것이 애국계몽운동이었다. 경제적 자립운동, 정치사회단체활동, 언론기관의 계몽활동, 민족교육운동 등 다양한 활동이 전개된다. 개중에서도 통감부가 설치되고 구체적인 침략이 보이기 시작하자 사람들은 뒤늦었지만 교육의 필요성을 통감하게 된다.

그리하여 학교설립을 서둘렀다. 요원의 불길처럼 교육운동이 전개되기 시작한다. 물론 모두 사립학교이며 시설이나 교재가 제대로 갖추어지지 않은 곳도 많고, 그냥 노래를 부르고 군대식 훈련을 하며 항일 의식을 부추기는 곳도 많았다. 평안도의 어느 일본 관리의 보고서에 의하면 두세 집 건너 하나씩 학교를 세운다고 표현하고 있다.

한편 이 시기를 전후하여 설립한 보성, 휘문, 중동, 진명, 숙명, 대성, 오산, 동덕 등 수많은 사립 명문교가 태어났으며 이전부터 왕성하게 보급해 왔던 기독교계의 학교설립도 현저히 증가하였다. 이를 두고 한국교육사는 교육구국주의 사립학교운동이라고 말한다.

xxxviii 1854~1907年

xxxix 壬午事變。1882年7月23日、閔妃に不満を持つ旧式軍隊と閔妃と対立する大院君が起こした暴動。閔妃一族の政府高官、日本人軍事顧問、日本公使館員らが殺害され、日本公使館が襲撃された。

xl 第二次日韓協約(乙巳條約、日韓交渉條約、日韓保護條約)、1905年11月17日締結。

xli 1911年8月24日公布。

xlii (原文)

방정환이 보성소학교에 입학한 것은 1905년의 일이다. 그 해에 신설된 보성소학교는 고종에게 신임이 두텁고 친러파였던 이용익李容翊이 설립한 것이다.

이용익은 임오군란(1882) 때 장호원에 피신한 민비와 고종 사이를 연락하는 비밀사자였다. 민비가 환궁한 후 중용된 것은 말할 것도 없다. 민비 사후에도 고종의 최측근으로서 중

책에 기용되었고 1904년 당시 그는 나라의 재정을 책임지는 탁지부대신과 내장원경을 겸하고 있었다.

그러나 이용익은 러시아와 가깝기 때문에 일본측에서 보면 눈엣가시 같은 존재일 수밖에 없었다.

1904년 2월부터 ‘을사 5조약’의 선행과정으로 ‘한일의정서’의 본격적인 교섭이 시작되자 이용익은 반대를 계속 주장하다가 그 달 22일에 강요당한 서명을 거부하였다. 이용익은 그날 밤 안에 일본으로 납치되어 갔으며 명목은 유람이었으나 10개월 간 연금당한다. 물론 모든 관직도 박탈되었다. 귀국하게 된 이용익은 보성학교를 설립하고 보성사라는 인쇄소를 세우고 교육과 문화사업에 주력하려 했으나 결국 블라디보스톡으로 망명하게 된다.

이 시기에 학교를 세우는 것은 바로 독립운동이요, 민족운동이었다. 이를 일본이 가만히 보고 있겠는가. 1908년 통감부시대의 <사립학교령>과 1911년의 조선총독부의 <제1차 조선교육령>에 의해 사립학교 운동은 뒤서리를 맞고 반수 이상이 문을 닫았다.

방정환은 일곱 살 (만 다섯 살)의 나이로 보성소학교 유치반에 들어갔고 전교에서 제일 어린 학생이었다. 그 시절을 회고한 방정환의 글은 우습고 재미있는 에피소드로 가득 차 있다.

하기야 어린 그가 역사의 뒤안길을 알 리가 없다. 적어도 보성소학교에 다니던 2·3년 동안 정환의 집은 야주개의 부자였고 동네의 귀염둥이였으니까 나날이 즐거웠을 것이다. 그러나 그의 찻잔 속의 행복은 가족도 나라도 지켜줄 수 없는 시대의 격랑 속에 휘말려 들어가고 있었다.

<sup>xliii</sup> 大韓帝国 (1987-1910年) の時代。

<sup>xliiv</sup> 後に徳寿宮に改称

<sup>xlv</sup> ハーグ密使事件。1907年、大韓帝国がオランダのハーグで開催されていた第2回万国平和會議に密使を送り、自国の外交權回復

を訴えようとした。

<sup>xlvi</sup> (本文)

1907년 야주개의 알부자가 알거지가 되는 날이 왔다. 증조부의 사업실패라고도 하고 작은할아버지의 새 사업 실패라고도 기록되고 있으나 집안의 어른들이 시작한 사업이 잘못된 것으로 짐작이 된다. 빚에 몰려 겨우 몇 가지의 이부자리와 부엌 세간만 가지고 사직동도정궁 앞 허름한 초가집으로 옮겼다.

고려시대부터 일구었고 구한말에는 궁궐 앞에서 왕실에 납품도 하면서 탄탄한 알부자로 성장한 온양 방씨 가계가 아닌가. 아무런 기록은 없으나 왕실의 몰락과 전혀 무관하지 않는 것으로 보인다.

민비가 시해되고 이어 아관파천 이후 1년간 왕실의 거처는 경운궁(후에 덕수궁으로 개칭)이 되었다. 오랫동안 왕실과의 거래가 있는 방씨네는 이러한 변화에 남다른 감각을 가지고 있었으리라.

청일, 러일 양 전쟁에 승리한 일본이 발빠르게 침략을 가한 것은 우선 왕실에 대한 공략이었다. 고종의 목을 죄어가던 통감 이또오伊藤가 결정타를 친 것은 헤이그 밀사 사건이다.

1907년 6월에 화란의 헤이그에서 열린 제2회 만국평화회의에 고종이 이준, 이상설 두 밀사를 보냈다. 여기에 러시아 공사관의 이이중 참사관이 합류하여 이들 세 사람은 참가국 대표들에게 한국문제를 다루어줄 것을 부탁한다. 이것이 발각되자 이또오는 그 책임을 물어 7월에는 고종을 강제로 양위시켜 버린다.

대한제국은 이미 외교권을 박탈당한 뒤였지만 일본의 불법행위와 을사보호조약의 무효화를 세계 열강에 호소해 보려는 고종의 몸부림이었다. 한가닥 희망을 걸었던 계획은 수포로 돌아가고 왕실의 몰락은 가속화된다.

한국군대가 해산된 것도 같은 해이다. 날이면 날마다 와르르 와르르하고 나라의 기틀이 무너지는 소리가 들리는 듯하였다. 방씨 가문도 이와 때를 같이 하여 무너졌다.

방정환이 천진난만하게 야주개 거리를 뛰

어다니고 있을 때 집안의 어른들은 왕실과의 거래도 어렵게 되어 가고 일본인 상인의 진출로 날로 어지럽게 돌아가는 세정에 몹시 불안해 하고 있었다. 살길을 찾아 새로운 전기를 마련해야만 했다. 고로 무엇인가의 사업에 투자한 것이리라. 새 사업의 실패로 하루아침에 집안은 벼락맞은 듯 풍비박산의 꼴이 되어 버렸다.

정환의 할아버지와 아버지는 인쇄소에서 일하게 되었지만 가족을 부양하기에는 힘이 부족했다. 굶기를 밥먹듯이 하는 날이 계속된다.

방정환의 어린 시절을 회고한 글에는 배고픈 서러움이 절절히 기록되어 있다. 도시락 없이 학교에 가서 다른 아이들이 점심을 먹는 시간에 혼자 변소 뒤에 숨어 있기도 했다. 왜 하필 냄새나는 변소 뒤였을까. 텅 빈 운동장에 적당히 있을 곳이 없었는지 아니면 누구 눈에도 띄지 않는 장소가 그곳밖에 없었는지.

한때 학교 가는 길에 대고모 집에 들러서 밥도 얻어먹고 그 집에서 도시락도 싸준 일이 있었으나 해결책은 아니었다. 이 집 저 집 쌀 꾸러 다니는 것도 정환이 해야 하고 집에 우물이 없으니 동네 우물에서 물기는 것도 그가 해야 하는 일이었다.

xlvii (原文)

쌀 꾸러 다니기, 전당포 다니기, 그런 것 외에 또 한가지 고생스러운 일은 물길어 오기였습니다. 하인도 없고 어른들은 활판소에 가고 또 삼촌 한 분은 남의 상점 점원으로 가고, 물을 길어 올 사람은 열 살 먹은 나 하고, 여덟 살 먹은 사촌 동생 밖에 없었습니다.

집이 사직골이었으니까, 우리 집에서 두어 마장쯤 떨어진 곳에 사직 뒷담 밑에 성주 우물이란 우물이 있는데 학교에만 갔다 오면 물통(석유통) 하나를 들고 가서 물을 길어 가지고, 열 살 짜리 여덟 살 짜리가 둘이 들고 비틀비틀 하면서 집으로 옮겨 나르기에 어떻게 힘이 드는지……,

‘인제 여덟 번째다, 인제 아홉 번째다, 인제 세 번 남았다.’ 하면서 헤어가면서 길었습니

다.

그나마 여름에는 별 고생이 없지만 겨울이 되면 물이 나오지 않고 밑바닥에 조금씩밖에 안 나오므로 물난리가 날 지경이어서 우물 앞에 차례로 온 대로 물그릇을 조르르 늘어놓고 기다리어 자기 차례가 되어서 바가지를 들고 우물 속에 기어 들어가서 떠 가지고 나오게 되므로, 우물 앞에는 물통과 물동이 가 골목 밖에 까지 체조하는 병정처럼 늘어 놓이고 자기 차례 오기를 기다리지만 두 시간씩이나 기다리게 되었습니다.

날은 차고 바람은 살을 에일 듯이 부는데, 배가 고프고 몸은 떨리고……, 우물 옆에서 두 발을 동동 구르고 올던 일이 해마다 겨울마다 몇백 번씩인지 모릅니다.

xlviii (原文)

이 시기에 가장 서러웠던 일은 두 살 위인 누나가 열두 살의 나이로 시집을 가게 된 일이다. 입 하나 줄이기 위한 궁여지책이었다. 정환은 어른이 된 후에도 이 누나와의 슬픈 이별을 잊을 수가 없었다. 방정환이 처음 지은 동요는 ‘형제별’이다.

날 저무는 하늘에 별이 삼 형제  
반짝반짝 정답게 지내더니  
웬일인지 별 하나 보이지 않고  
남은 별이 둘이서 눈물 흘린다

이 동요는 일제시대에 고향을 등지고 낯선 땅으로 유랑하는 민족의 애수를 노래한 것이라는 설이 있으나 정환의 슬픈 가족 사연이 밑바닥에 깔려 있다는 설이 설득력 있게 전해진다. 여기서 보이지 않는 별 하나는 시집간 누나이며 남은 별은 어머니와 정환이란 다. 병약한 어머니의 간호를 도맡아 하던 누나가 떠난 후 어머니를 보살피는 일도 정환의 몫이 되었다.

그 와중에도 다행이었던 것은 정환이 학교에 다닌 일이다. 배를 쫓출 골고 공부한다는 것이 얼마나 힘이 들었을까마는 아이들은 배



위야 한다는 것이 방씨 집안의 필사적인 노력  
이요, 또한 그 시대의 민족 과제이기도 했다.

<sup>xlix</sup> 1861年4月8日-1922年5月19日

<sup>1</sup> 1922年、開闢社。方定煥が翻案、編纂した  
韓国最初の世界名作童話集。方定煥が日本  
留学中の1921年に東京で出版されていたア  
ンデルセン童話、グリム童話、アラビアン  
ナイトなどを日本語から翻案した。